

## 埴谷さんとの若干の交渉

長瀬 隆

戦後初期、一九四八年の雑誌「思潮」の八月号には「ドストエフスキーをめぐって」という長い座談会が掲載されている。出席者は木寺黎二、埴谷雄高、中村真一郎の三人である。このうちの最初は、本名を松尾隆といい、早大教授であった人である。戦前に近年復刻されたとつたえられる「ドストエフスキー文献考」の著作があった。しかし戦後は本名にかえり、マルクス主義哲学の啓蒙活動に従事、平和運動、および学生運動の指導にあたった。ドストエフスキーからは去つたのである。

しかし世間には木寺黎二のその面での業績を知っている人々はいた。そして当人の意志とは無縁にこの面で「脚光」を浴びたことがすくなくとも一度はあった。

その発端となつたのは小林秀雄の「ドストエフスキーの生活」をめぐつての埴谷雄高の「八割までがE・H・カーによつてゐる」、つまりは「剽窃である」という発言であつた。一九八九年に埴谷その人に質したところによると、うっかりと花田清輝にもらしたところ、話が話であつたので、急速に世間に広まり、騒動となつたのである。

この真偽を判定できるのは木寺黎二以外にないだろうということになり、或る新聞が木寺に原稿を依頼したのである。原稿は三回分がきつちりと書かれ残っている。しかし発表されなかつた。私が想像するに、小林本人が木寺を訪ね何らかの釈明をおこなつたからであり、木寺がそれを了としたためであつた。

もともと面識のなかつたはずの小林突然の来客は、戦前から親交のあつた窪川鶴次郎には話されたはずである。かくて窪川は自身が編集長であつた「思潮」で前記の座談会を企画したのである。司会は窪川自身によつてなされ、木寺の発言からはじまつている。

木寺その人は一九五六年に四九歳でなくなり、一九八六年に没後三十年の集まりがもたれ、文集「松

尾隆」(副題に「早稲田の疾風怒濤時代を駆け抜けた一教師」)新制作社から刊行された。その準備の過程で一連の遺稿が発見され、そのうちにこの発表されなかつた小林問題にかんする文章があり、文集に収められた。またドストエフスキーについての大きな未完の論文が発見され、私が読むことになり、一年かかつてペレヴエルゼフの一九二二年の論文「ドストエフスキーの創造」の翻訳、それも戦争中の仕事であることを特定した。かくてテキストを手し私が新たに翻訳することになった。その経緯はみずす書房一九八九年刊の訳書の解説に記してある。

小林問題の文章では、「ヒョーゼツ」発言が引き起こした思わぬ波紋の大きさに狼狽した埴谷もまた擲かれていた。それにたいする埴谷の反応が知りたくもあり、私は一九八九年にその人に接することになった。

前記の座談会は今日まで数多くなされてきたドストエフスキーをめぐつての座談会のなかでも屈指の水準のものであり、そしてそれは木寺黎二の学識に支えられていた。埴谷はそれを認め、「ドストエフスキー文献考」が若干二八歳の青年の仕事であることに感嘆していた。

私の訳書にたいする評は、「バフチン後の翻訳であつて君は損をした」というものであつた。私はそうは思わないと応じたのであつたが、この問題でより徹底的に話しあつたのは当のバフチンの訳者である新谷敬三郎であつた。「だれもペレヴエルゼフをやらなかつたのは、(日本のドストエフスキー学にとって)問題だつた」と彼は正直にもらしていた。バフチンの仕事はペレヴエルゼフに多くを負つており、しかし批評としては後退していると私は見なしている。

訳書の後書で私はペレヴエルゼフの次作「ゴゴリの創造」の翻訳にはいつていることを記した。しかし三分の一終えたところで一九九一年にベルリン、バルト三国、チェルノヴィリを旅した。そこでは同行の広島医学者は被ばく者とその医師たちのあいだで救済者として迎えられた。思えば私ははじめてモスクワの土を踏んだのは一九五七年のことであり、成立して三年を経ていた原水爆禁止運動から出されてであつた。私はその縁で原爆被爆者の配偶者をもつことになり、生まれ育つてソ連占領下で暮らして引揚た樺太を主題として「樺太よ遠く孤独な」(一一八八四、西田書店)に続いて、彼女と結びつくこと

になった経緯を記した作品「ヒロシマまでの長い道」(一九八九、晩聲社)を発表していた。

その二つの作品は、松尾隆が私にベレガエルゼフについては一言も語らずに逝つたために、私が書くことになったものであった。もしも教授が私に語っていたならば、私は「ドストエフスキの創造」を六〇年代初めには翻訳していたはずであり、それをきっかけにロシア文学者の人生を歩んでいたはずである。

帰国した私は翻訳は止めて作品「微笑の沈黙」に集中することになった。それは一九九五年に先のもと同じ晩聲社から刊行された。そのすこし前に私は壇谷さんに最後のものとなった電話をしている。だれにたいしてもそうだったようなのであるが、語りはじめたら止まず、とめどもなく長く語る人であった。

壇谷のドストエフスキが何であったかが検討されねばならない。私自身は小さくない疑問を抱いてきた者であり、みずからドストエフスキ論を書くことによつてそこを明らかにしようと考えている。

(一九九七年五月七日筆)

## 壇谷さんを悼む

小山田 チカエ

「ドストエフスキ その生涯と作品」(昭和四〇年日本放送出版協会刊)を大分前から私の枕頭に飾ってあった。今年の夏はこの外暑く、秋に入り雨続きでうつつおしく、やはり読書が一番人間をいやして下さる。

私は壇谷雄高先生は生前、唯一度ドストエフスキの会主催の御講演終了後、早稲田大隈講堂の離れにて二次会パーティの席上、先生の向いの席にて沈黙のまま、先生は大変御声も張りのある御声で、読書会のメンバーと何事か話題に御応じていらした。読書会の女の方がおふたり程先生に、色紙をたずさえ一筆、と待ちかまえていらした。すると先生はふと私の方に御顔をむけられ、僕亡き小山田二郎を知っていますと意味あり気に申され、私に手招きをして下さつて、色紙に「真を映すことは最大の困難なり」小山田チカエ様、と記された。現在も大切に眺め、預っております。